

平成29年9月

山本幹枝 学位論文審査要旨

主査 花島律子
副査 小川敏英
同 兼子幸一

主論文

Association between exercise habits and subcortical gray matter volumes in healthy elderly people: A population-based study in Japan

(健常高齢者における運動習慣と脳皮質下灰白質容積との関連：日本における集団研究)

(著者：山本幹枝、和田（礒江）健二、山下典生、中下聡子、岸真文、田中健一郎、山脇美香、中島健二)

平成29年 eNeurologicalSci 7巻 1頁～6頁

参考論文

1. 抗N末端 α -エノラーゼ抗体をみとめた急性小脳失調症の1例

(著者：山本幹枝、和田健二、米田誠、土井浩二、古和久典、中島健二)

平成22年 臨床神経学 50巻 581頁～584頁

2. ホモシスチン尿症をともなったメチルマロン酸尿症の1例

(著者：山本幹枝、安井建一、渡辺保裕、古和久典、山口清次、中島健二)

平成27年 臨床神経学 55巻 23頁～28頁

審 査 結 果 の 要 旨

本研究は健常高齢者を対象にMRIを用いて自動化セグメンテーション法により脳皮質下灰白質容積を算出し、運動習慣や認知機能との関連を検討したものである。その結果、運動習慣を有する者は有しない者に比較して側坐核容積が大きく、また側坐核容積は縦断的な認知機能低下とも関連していることが判明した。本論文の内容は、認知症を含めた神経画像診断学の分野で、脳皮質下灰白質の中でも側坐核の容積が認知症発症予測に有用である可能性を示唆するものであり、明らかに学術水準を高めたものと認める。